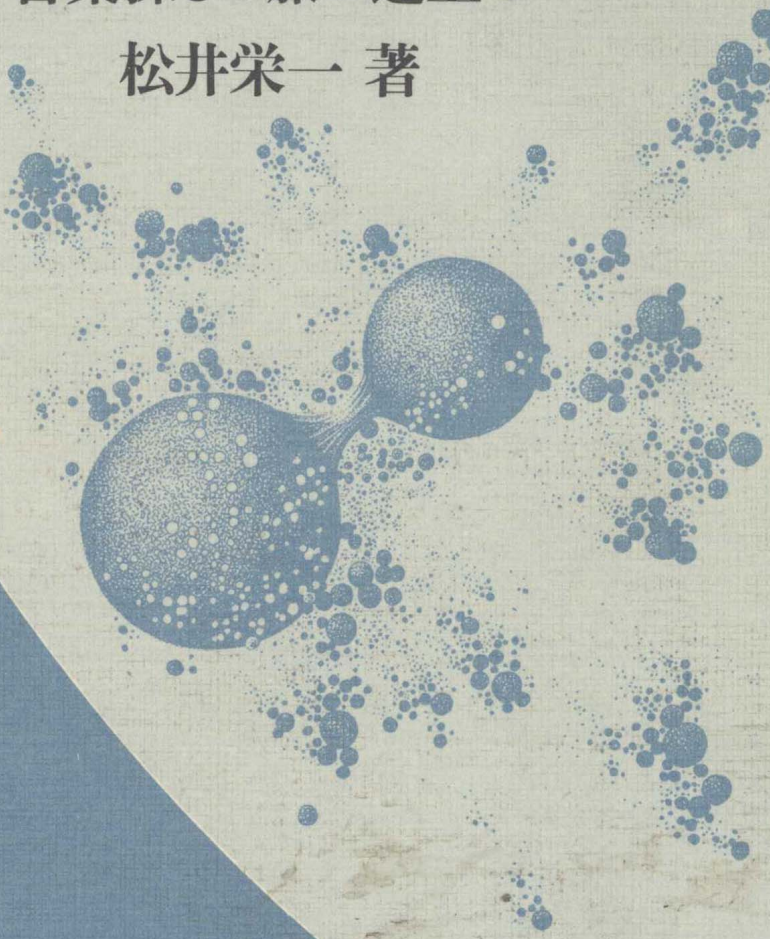
叢書・ことばの世界

国語辞典にない言葉

言葉探しの旅の途上で

松井栄一 著



著者略歴
松井栄一（まつい しげかず） 1926年生れ。東京大学文学部国文学科卒業。国語学専攻。1969年武蔵大学助教授。その後『日本国語大辞典』編集委員（代表）に就任。現在，尚学図書言語研究所員（顧問），国立国語研究所国語辞典編集準備調査会委員。

叢書・ことばの世界
国語辞典にない言葉
一九八三年四月二十五日　一刷発行
定価一六〇〇円
著者　松井栄一
発行者　南雲克雄
印刷所　慶昌堂印刷株式会社
発行所　株式会社　南雲堂
東京都新宿区山吹町二〇一　〒一六二
電話東京（二六八）二三一一（代）
振替口座　東京六―四六八六三番
製本　若林製本所
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通販係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
検印廃止

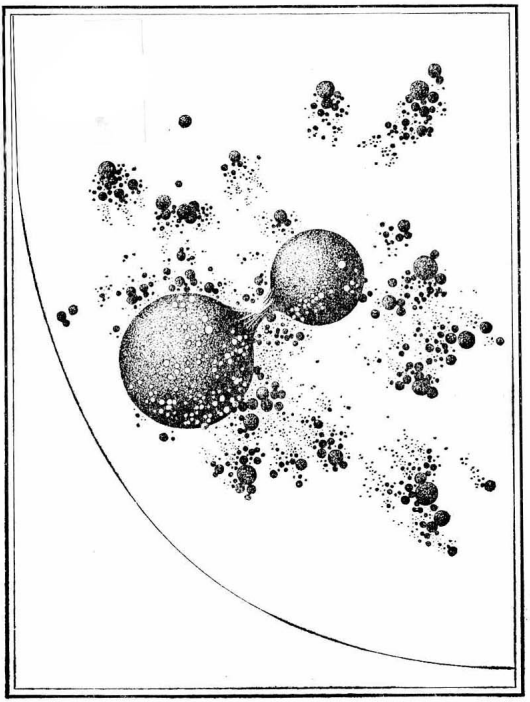
© 1983 Shigekazu Matui
Printed in Japan 〈1―88〉
1081-320088-5625

叢書・ことばの世界

国語辞典にない言葉

言葉探しの旅の途上で

松井栄一 著



南雲堂

装丁　斎藤和雄
挿絵　中島弘二

はしがき

『日本国語大辞典』（全二十巻、小学館）は、昭和五十一年二月に完結した。もとより、同辞典は多くのかたがたのお力添えや御指導があって初めてでき上がったものであるが、手元に残っていた『大日本国語辞典』（上田万年・松井簡治、冨山房）の増改訂のためのカードを利用することから始めた関係上、項目の撰択や原稿の調整の仕事などには、深くかかわることになった。それだけに、後で考えるとああすればよかった、こうもしたかったと残念に思うことがしばしばである。見出しに立てるべき言葉の使われた実際の例をもっともっと豊富に拾い集めておくべきだったということもその一つである。これは既に二十巻の編集中に痛感したことだが、将来の改訂に備えての言葉の採集は、そのころから始めて現在も継続している。

本書ではその経験にもとづき、言葉の使用例を集めることから始めてそれがどう役に立つかということを中心に、さまざまの問題をとりあげた。いきおい、『日本国語大辞典』を初め現行の諸辞典に見られないような言葉や用例について触れることが多くなったのでそれを書名としたが、本文中でもたびたび述べているように刊行した辞典についての反省と、その改訂補充のための作業の中間報告とが眼目であることをお断りしておきたい。

本書の引用例は資料としても役立つよう、原文に忠実に、なるべく多くとり入れることを心が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けた。ただ、本叢書の性格である読みやすさという点を考慮して、漢字は新字体とし、ルビを一部省略、拗音促音の文字を小さくするなどの手を加えた。

記述に当っては、見坊豪紀氏の書かれたものを問題のきっかけとしたことが極めて多い。この場をかりて同氏にあつく御礼申しあげる。また、本書は見坊豪紀氏ならびに飛田良文氏の熱心なお勧めと、南雲堂の佐伯久氏のしんぼう強い励ましとによって初めて成ったものである。心から感謝の意を表する次第である。

昭和五十八年三月六日

松井　栄一

国語辞典にない言葉・目次

はしがき　3

辞典作りへの道

1　祖父松井簡治と辞典　11

2　辞典作りへの道　17

用例の重要性と言葉の採集

1　言葉たちの声が聞える——辞典の用例　27

2　継続は力なり——言葉の採集(一)　36

3　読み物としての辞典——言葉の採集(二)　45

言葉のカードと資料

1　労力と時間と場所——カードの整理　57

2　「ことばのくずかご」の補遺——私のカードから　65

こんな「ずむ」がある(六五)　川端康成氏は「指ざす」と言う(七〇)

新しい用法(七二)　こんな言い方がある(七六)　一行情報・ことば

の顔さまざま(七九)　辞書にないことば(八二)　私が作った(八三)

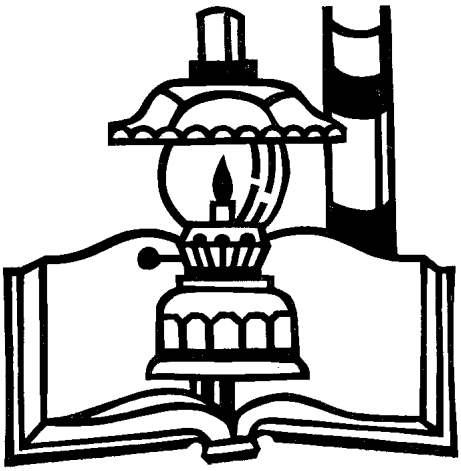
3　資料を求めて——原本の大切さ　88
感味(八九)　未亡人(九一)　ぼってり・ぼってり(九三)　再発(九四)
映画(九七)　図書館(九九)　作法(一〇一)　すっとこどっこい(一〇五)

国語辞典にない言葉と用例
1　語の意味と用例——用例使用のむずかしさ　111
2　規範性と資料性——見出し語の問題(一)　125
3　「さ」と「ぽい」の付く語——見出し語の問題(二)　147
4　新しい動詞——「〜づける」について　173

言葉のゆれと語源など
1　言葉のゆれ——変異形あれこれ　193
2　言葉探しの旅の途上で　212
へどろ(二一三)　おあいそ(二一六)　なまあたらしい(二二四)

索引　246
語彙(二四六)　人名(二四一)　資料名(二三七)

辞典作りへの道



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1　祖父松井簡治と辞典

祖父松井簡治は、明治から大正中頃までの約二十年間に『大日本国語辞典』を編んだ。わが家に一枚のパンフレットが残っている。昭和三年に索引ができて、本文四巻、索引一巻の全五巻が完結し、改めて二万部限り特価で提供するという宣伝用のものである。「大日本国語辞典批評集」と題して、新村出、藤村作、保科孝一、吉沢義則の諸先生の推せん文が載っており、ほかに編纂に着手してから完成に至るまでの簡単な経過が、波ケイに囲って示してある。

明治二十五年	この年より約六ヶ年間参考書籍の渉猟蒐集に費す
明治三十一年四月	この年より約五ヶ年間前記参考書の便覧索引作製に従事す
明治三十六年七月	編纂開始、その後第一巻発行に至るまで編纂と同時に校正に従事す
大正三年十月	略原稿全部出来
大正四年十月	第一巻発行
大正五年十月	第二巻発行
大正六年十月	第三巻発行
大正八年十二月	第四巻発行
大正九年二月	索引に着手
昭和三年四月	索引校正終了

昭和三年九月　索引発行
――前後通じて三十六年――

よき時代のうらやましい進行ペースであるが、一人でやるとなれば大変なことである。祖父の、国史学会での講演「辞書と歴史研究」が『国学院雑誌』（昭和二年一月）に活字化されているが、その中に辞典の編纂の話が出ている。

まずおもな古典の索引を作ってどのくらい言葉があるかの見当をつけてみたら四十万ばかりだとわかった。ところが、勘定してみると四十万を処理して行くことは無理だと思われる。そこで二十万に減らしてみる。一年を六十五日は休むものとして、三百日と見ると二十年で六千日になる。六千日で約二十万を処理すると考えると、一日三十三語くらいになる。これならば何とかやれそうだ。祖父はそう考えたというが、毎日三十三語と口で言うのは簡単だが、実際には相当きびしい仕事量だ。そのやり方について祖父は次のように述べている。

病気がないものと私は信じて三十三と決めまして、毎日三十三はやりますけれども、其三十三と云ふものも、或は一つの言葉でもって一日或は二日位掛ることもあります。さうすると翌日六十六、三日掛ると九十九になって終ふ、さう云ふ風で段々溜って参ります、なかなか困難である、毎日時間はどう云ふ風にしたかと云ふと、五時間と決めて居る、公務もありま

すから、それを差引いて五時間と決め、其五時間をどうしたかと云ふと、私は大抵宵に早く寝て朝早く起きる、今日は少々朝寝になりましたが、其時には大抵は三時に起きます、四時五時六時七時八時と五時間、斯うなりますと訪れて来ない、何の用事もない、それでありますから安心して其五時間の利用が出来ます、

講演筆記なので表現のととのっていない部分もあるが、話はよくわかる。編纂開始の明治三十六年から、四巻を出し終わった大正八年までの間は、東京高等師範学校の教授と学習院の教授とを兼任しており、そのほかにも学校の評議委員や文部省視学委員などを命ぜられ、最も忙しい時期であったと思われる。家に居ても人が訪ねてくればその間は仕事ができない。そこで、早寝早起であったこともあって誰にもわずらわされない午前三時からの五時間を辞典にあてたのだろう。年譜によると明治三十八年から毎年京都奈良地方へ研究指導の旅行もしているから、その間は当然仕事にかかれない。そういうやむを得ないことで停滞した場合は七月八月の休暇で取り返したという。

七月八月で取返すのは、それは夏になりますと日が長うございますので、是は十時間と決めまして、十時間は間違なくやります。勿論十時間以上時間は取れますけれども、頭脳は承知しませぬ、それからは幾らやっても進行しないのでありますからそれで止めます。十時間過

ぎまするとと後はやらない、さうしますと云ふと七十日ばかりありますから、此七十日で遅れましたのを取返すことが出来るのであります。さう云ふ事を繰返して二十年ばかりやりましたが、幸ひに感冒にも罹らず何も病気はありませぬでした、そんな風でありますから丁度斯う云ふ編纂をしますのは、私は斯う考へて居る、能く言ふ例へば子供を育てるやうな話で、毎日随分骨も折れませうが、どんな親でも子供育ての苦心談をする人はない、つまり毎日段々育って行くのが非常に楽しみでありますから、一向苦痛と感じませぬ、子供の愛の為にさう云ふ苦痛は忘れられるのであります、私共も字引を拵へるのは毎日面白い、是が出来たと云ふやうにして、悦んで居るのでありますから、一向苦痛とは思はない、

祖父の辞典編纂については、これまで多くのかたが、三時に起きて五時間、一日三十三語を目標にして遅れた分は夏休みに取り返す、これを二十年間続けて完成したということを紹介し大変なことだと嘆賞してくださっている。もちろんそれは大変なことに違いないし、わが祖父ながら驚嘆せざるを得ない。だが、私は大変な事実そのものよりも、そういう大変なことがなぜやり通せたのかという方に関心がある。そして、その理由は、第一に楽しみながらやっていたということ、第二に決して無理をしなかったということだと思う。ちょうど子供を育てるのと同じように、骨も折れるがその成長が楽しみだった、だから仕事に一向苦痛を感じなかったと言っている。夏休みにはやろうと思えば十時間以上の時間をとることもできたが、それでは頭が疲れて能

率が上らなくなる、だから十時間やればそれでやめたという。これらが二十年間コンスタントにやれた大きな要因であろう。長期間継続する仕事にはこの二つのことがいかに大切かは、私のささやかな経験からも言えることである。

ところで、こういう仕事ぶりからすると、祖父はいかにも堅苦しい、がんこ者のように思われそうだが、私の知っている限り、そういう点は全くなかった。書斎で仕事をしている祖父には何となく近づきがたかったが、夕食時には好きな酒を父と飲みながら楽しそうに話をしていたし、夕食後は日課として吉川英治が新聞に連載していた小説「宮本武蔵」を祖母に読んで聞かせたりしていた。長時間すわっての仕事で運動不足になるため、毎日自己流の簡単な体操もしていたし、近くに住んでいて編纂の手伝いをしていた弟と毎週一回将棋を指すことを楽しみにもしていた。そういう祖父の姿は孫にとっては全く普通のおじいさんであった。私たち兄弟は、乱暴にも家の中で野球をしてゴムまりを仏壇の中に飛び込ませたり、ふとんを重ねて飛び箱代りにして遊んだり、部屋に夜具を敷きつめてその上ですもうをとったりしたにもかかわらず、祖父に叱られたことは一度もなかった。全くやさしいおじいさんであった。祖父の古稀祝賀の『記念誌』（昭和七年）を見ても、松井式一流の洒落ユーモアが時々飛び出す、何事も善意に解していつもにこにこしているなど、親しみやすい人柄ということを多くのかたが言っておられるから、多分外でも同様だったのだろう。

祖父と起居を共にしていた家は目白台（現在東京都文京区）で、旧目白坂を登り切るやや手

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com